

## 徳川幕府の大名改易政策を巡る一考察（二）

著者	笠谷 和比古
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	4
ページ	123-147
発行年	1991-03-30
その他の言語のタイトル	A Study of the Policy of Daimyo "KAIEKI" Enacted by Tokugawa Government
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00000920">http://doi.org/10.15055/00000920</a>

## 徳川幕府の大名改易政策を巡る一考察（二）

笠谷 和比古

### 第三章 大名改易の実現過程

前二章の事例に見たように、これまで最も政治的な疑獄性の濃厚なものとされてきた、福島・加藤両家の改易についても、その事実経過を丹念に観察するならば、決して、幕府側の政略的ないし一方的な処断ということはできないであろう。この両家の改易については、両家の側に処断されて致し方のない違法行為のあることは明白であり、従ってまた、当時の人々、諸大名の受けとめ方も幕府の処置を、やむを得ざるものとするところにあつたように思われるのである。

このように徳川幕府による大名改易は、その事態の内容の面からして、政略的なもの、或いは何がしかの既定方針に基づいた権力主義的政策といった性格のものではないことが了解されるであろうが、

そのことはまた、この大名改易という事態の形式面、即ち大名改易の実現過程における、その実現のあり方の側面についても言いうるところなのである。本章では、既述の二事例に自余の大名改易の事例をも加えつつ、専ら大名改易なるものの実現過程の性格・特色について、これを見ていこう。蓋し、このような重要政策の実現のされ方、形式的な面にこそ、当該国制の政治的、権力的性格が端的に反映されるものだからである。

なお大名改易の実現過程のうち、第一節では改易の決定過程を、第二節では居城と領地の接収という改易の執行過程を検討することとする。

#### 第一節 改易事情の公開の原則

##### 第二項 諸大名への事情説明

(1) 江戸城などへ招集のうえでの伝達

表1は徳川幕府の覇権が確立した元和元年の大坂の陣以降の、国持大名を中心とした大名の改易の一覧表であるが、この改易の際に、その事情や背景について、幕府から諸大名に対してこれを伝達するという行為が、幾つか史料的に確認される。

第一章に見た、元和五(一六一九)年の福島家の改易事件では、その六月一〇日に諸大名の老臣を伏見城に集め、そこで幕府老中列座において本多正純が、同事件の経緯と福島家の改易を発令した事情について詳細な伝達をした(史料2)(史料3)。第二章の寛永九(一六三二)年の肥後加藤家の改易の折りにも、その六月一日に、江戸城に出仕してきた諸大名に対して、(史料15)に示した内容を伝達している。

さて問題となるのは、この幕府の行っている伝達行為の意味であろう。改易事情についてのこの伝達行為は、大名改易という政治過程の中で如何なる位置づけがなされているものであろうか。考えられる一つの意味は訓戒、警告といったものであろう。福島家の場合は、城郭の無断修築の禁という幕府の法度に対する違反が事件の中心であり、加藤家の場合は「謀害」の発給という謀叛の嫌疑に関わるものであったから、諸大名への伝達にそのような意味が込められるのは当然といえる。幾つかの御家騒動に端を発して改易に処せられた場合には、そのような意味あいが強いのという。しかしなが

ら、以下のような事例とも併せ見てみるならばそれだけではすまないであって、この大名改易に際しての事情伝達には、より政治的に重要な意味が見てとれるのである。

すなわち表1に示した通り、寛永一〇(一六三三)年に改易となった出雲堀尾家の場合は無嗣断絶であり、同二〇年の会津加藤家の場合は自発的な領知返上の申し出を改易理由とするものであり(それが真実の理由であるかどうかはともかく)、それ故に、その事情伝達を警告・訓戒として捉えるのには、ややそぐわないものを感じるのである。

例えば堀尾家の改易の場合、幕府は在江戸の国持大名たちを江戸城に集めて、幕府元老格の井伊直孝および酒井忠世・土井利勝・酒井忠勝の三年寄列座のうえで、次のような將軍家光の意向を伝達している。

〔史料16〕 出雲堀尾家改易理由の伝達(酒井家文書<sup>(48)</sup>「幕府日記」)

寛永一〇年九月二七日条

「堀尾山城<sup>(忠晴)</sup>守事、云年来之好、云壮年、御奉公申上時分、病死不便思召、息<sup>レ</sup>於有<sup>レ</sup>之は跡職、雖可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>仰付。無<sup>レ</sup>之、其上遺言<sup>ニ</sup>は雲隠両国、就<sup>ニ</sup>差上<sup>レ</sup>之、為<sup>ニ</sup>御仕置<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>遣<sup>ニ</sup>。上使<sup>ニ</sup>也、此段、御直、可<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>仰聞<sup>ニ</sup>処、依<sup>ニ</sup>御不余氣<sup>ニ</sup>、以<sup>ニ</sup>右四輩<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>被<sup>ニ</sup>仰出<sup>ニ</sup>也」

表1 国持大名の改易と改易事情の伝達

年月	改易大名	領地石高	改易事情と事後措置・関連事項	改易事情の伝達	典拠
元和二・七	松平忠輝	越後高田六〇万石	不行状、將軍への不敬。伊勢朝熊配流	(不 明)	「梅津政景日記」他
五・六	*福島正則	安芸広島四九・八万石	城郭無断修築、破却有免条件の不履行。川中島四・五万石に移封、逼塞		
六・八	*田中忠政#	筑後柳川三二・五万石	無断断絶。	(不 明)	「部分御旧記」
八・八	*最上義俊	出羽山形五七万石	家中騒動。近江・三河国にて一万石下賜	諸大名に伝達、私書状でも伝達	「部分御旧記」
八・八	本多正純	下野宇都宮一五・五万石	不臣の振る舞い等。出羽由利に配流	諸大名に老中より個別伝達	「部分御旧記」
九・二	松平忠直	越前福井六七万石	不行状、將軍への不服従。豊後萩原に配流、子に越後高田二六万石下賜	(不 明)	
寛永四・一	*蒲生忠郷#	陸奥会津六〇万石	無断断絶。弟忠知に伊予松山二〇万石下賜	(不 明)	「幕府日記」他
九・六	*加藤忠広	肥後熊本五二万石	忠広子光広の謀書の発給および妻子の無断帰国等。出羽庄内へ配流	月次登城の諸大名に罪状伝達	「幕府日記」他
九・一〇	徳川忠長	駿河府中五五万石	不行状、將軍への不服従。高崎逼塞	在府諸大名へ伝達	「幕府日記」他
一〇・九	*堀尾忠晴#	出雲松江二四万石	無断断絶。(領地返上申出)	在府諸大名へ伝達	「幕府日記」他
一一・八	*蒲生忠知#	伊予松山二四万石	無断断絶。(二度目の無断断絶)	(不 明)	「幕府日記」他
一四・六	*京極忠高#	出雲松江二六・四万石	無断断絶。甥高知に本領六万石分を播磨龍野にて下賜	(不 明)	「明良洪範」
一七・七	*生駒高俊	讃岐高松一七・一万石	家中騒動、国元家臣の大量脱藩。出羽由利へ配流、一万石下賜	在府御三家・諸大名へ伝達	「幕府日記」他
二〇・五	*加藤明成	陸奥会津四〇万石	国政不調により領地返上申出。隠居、子明友に石見吉永一万石下賜	在府国持大名らへ伝達	「稻葉日記」他
〔万治三・一一〕	堀田正信	下総佐倉一〇万石	無断断絶。子正休に切米一万俵下賜	幕府諸有司に伝達	「松平大和守日記」
寛文六・五	*京極高国	丹後宮津七・八万石	家中騒動。南部重信に預け、嫡子以下も諸家に預け	端午節句登城の諸大名に伝達	「松平大和守日記」
天和一・六	松平光長	越後高田二六万石	家中騒動。松平定直に預け、切米一万俵下賜	在府諸大名に伝達	「松平大和守日記」
元禄一〇・八	*森 長成#	美作津山一八・六万石	末期養子発狂。無断断絶。父長継に備中西江原二万石下賜	(不 明)	

備考：元和二年以降の国持大名の改易について表示する。(「」)を付した二件は参考として併載する。\*印を付したものは外様大名を、#印を付したものは無断断絶を示す。

即ち、病死した堀尾忠晴については後継実子がなかったこと、また本人も、生前に領知返上を願っていたなどの理由に基づいて、領地収公の処置となったとの旨が伝達されている。

寛永二〇年の会津加藤家の改易の場合は、一層詳細な説明がなされている。同年五月三日に、在江戸の国持大名らを江戸城白書院に召して、元老格の井伊直孝、土井利勝・酒井忠勝の両大老、および堀田正盛・松平信綱・阿部忠秋・阿部重次の四老中という、この時期の幕閣を構成する閣老の全員が列座のうえ、酒井忠勝と松平信綱から次のような詳細な内容をもった伝達がなされた。<sup>(49)</sup>

〔史料17〕 会津加藤家改易理由の伝達（稲葉家中文書<sup>(50)</sup>「日記抜

書」寛永二〇年五月五日条）

一、加藤式部殿<sup>(明成)</sup>、近年病者ニ罷成、国之仕置も不ニ罷成、よき家来之者も不ニ残、御用ニ難ニ立候間、せめての御奉公ニ会津差上申度と、去年七月に御訴訟被<sub>レ</sub>申<sub>ニ</sub>付<sub>而</sub>、御老中色々御異見候得共、達<sub>而</sub>被<sub>レ</sub>申<sub>故</sub>、当三月御耳ニ立、御内々ニ様々被<sub>レ</sub>遂<sub>ニ</sub>御穿鑿<sub>ニ</sub>、御代々御取立と申、その上、左馬介子<sup>(加藤嘉明)</sup>ニも候と被<sub>レ</sub>思召<sub>ニ</sub>、御用捨<sub>而</sub>内蔵助<sup>(加藤明友)</sup>ニ知行相渡、其身ハ隠居をも仕候得と被<sub>レ</sub>仰出<sub>ニ</sub>候得共、右之通、仕置可<sub>ニ</sub>申付<sub>人</sub>茂無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>候間、其段も御免被<sub>レ</sub>成候様と被<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>候<sub>ニ</sub>付<sub>而</sub>、存心根も有<sub>ニ</sub>之哉<sub>与</sub>、松平伊豆殿<sup>(信綱)</sup>を以、御尋被<sub>レ</sub>成候得共、別之儀も無<sub>ニ</sub>御座<sub>ニ</sub>候由、以<sub>ニ</sub>誓紙<sub>ニ</sub>被<sub>ニ</sub>申上<sub>ニ</sub>候<sub>而</sub>、式部殿、如望、会津四十万石被<sub>ニ</sub>召

上、子息内蔵介ニ石見ニ堪忍分宅万石被<sub>レ</sub>下、式部儀、内蔵介領内ニ罷有候様と、於<sub>ニ</sub>酒井讃岐殿宅<sub>ニ</sub>五月二日被<sub>ニ</sub>仰渡<sub>ニ</sub>候

即ち、加藤明成は自分が病気となり、政治を任せられるしかるべき家来もいなくなったとして、会津四〇万石の返上を昨年七月以来、幕府老中の下に申し出てきていた。幕府老中たちは明成に思いとどまるように説得していたが、今年の三月になって將軍家光の耳にこのことが入ってしまった。家光は内々に明成を調べて、嫡子明友に所領を相続させ、自分は隠居をするがよいとの意向を示したが、明成はそれも辞退した。更に老中松平信綱をもって事情を尋ねたが、明成はこの度の申し出に何の含みもない旨を誓紙をもって言上したので、そこで会津の領知を収公し、嫡子明友に石見国で一萬石を堪忍分として下したというものである。

この時期のいずれの史料を見ても、右とほぼ同内容のことが記されており、このおりの幕府の事情説明は、詳細にして委曲を尽くしたものであったことを知る。<sup>(51)</sup>

この加藤明成の改易については、これに先立つ会津騒動の折りに、明成に背いて退去した旧家老の堀水主を、領地に引き換えても成敗せんと幕府に訴えたその所業の帰結であるとする、古くからの説がある。<sup>(52)</sup> また最近では、寛永一九、二〇年の大飢饉に際して、領内の<sup>(53)</sup>手当の不行き届きを咎められてのこととする説もある。

それ故に、右史料の幕府の説明にあるごとく、それが全く明成の自発的意志による領知返上であつたか否かについては、もとよりなお検討すべきことではあるが、ここで特に指摘したいことは、たかだか一大名の改易について、幕府がかくも詳細にして、その内輪の経緯にまで立ち入って説明をしているという事実である。改易事実の公表という限りでの行為ならば、加藤明成から幕府に領知返上の申し出があつたので、これを収公したという程のことの伝達で問題はないように思われる。

それ故に、返上申出を一旦遺留したとか、嫡子に相続させて本人は隠居すればよろうと説得したが、本人がなお誓紙まで提出したので、止むを得ず領知収公に至つたなどという、入念を極めた幕府の説明のあり方は、警告とか訓戒とかいつたものとは全く別の性格のものと言わざるを得ない。すなわち、この自発的な領知返上という異様な事態に対して、諸大名の疑念と動揺を鎮め、幕府としてはこの処置が如何ともしがたいものであつたことについての弁明であり、諸大名の了解を取りつけようとした行為であつたと解釈する他はないであろう。内部事情の公開による了解取りつけの行為として位置づけるべきものであろう。

このことは実は福島改易事件のそれについても言えることなのである。元和五（一六一九）年、伏見城における福島改易の伝達は、本多正純の「御理」としてなされておき、更に、老中列座のうえ酒

井忠世から「何レモ氣遣ヒ被<sub>レ</sub>致間敷ノ旨上意ナリ」（史料3）と述べられることで、福島正則の改易による諸大名たちの間の疑念と動揺に対する配慮の措置として、この伝達行為のあることが明示されているのである。<sup>(54)</sup>

実際、福島事件以外の場合にも大名改易の事情伝達は、諸大名の「氣遣い」への配慮として、幕府自身によってしばしば明示的に位置づけられているのである。

元和八（一六二二）年九月の最上改易に際しても、諸大名に対してその事情伝達が行われたが、更にそれとは別に、小倉藩主の細川忠利の下には幕府年寄の土井利勝から「自筆の捻文」が到来している。そしてそれは、「氣遣たるへきと候て」という趣旨でなされたものであつた。

寛永九（一六三二）年一〇月の徳川忠長の改易に際しては、細川忠利は在国中であつたために、幕府から細川家への改易事情の伝達は老中奉書によってなされているが、同奉書の尚々書には、「遠国ニ候間、無<sub>ニ</sub>御心元<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>ニ</sub>思召<sub>一</sub>与存申入候<sub>(55)</sub>」と記されていた。

また万治三（一六六〇）年の伊達綱宗逼塞事件でも、諸大名らの「氣遣い」「心元なさ」に対する配慮と明示したうえで、幕府からの事情説明がなされている。<sup>(57)</sup>

このように、大名改易の際の改易理由の諸大名への伝達は、諸大名の間での「氣遣い」、すなわち疑念・不安に対する配慮の措置と

して、当の幕府によって明言されてもいたのである。これらの事実からしてこの幕府の事情伝達は、もとより警告の意味も含まれるものではあるが、基本的には諸大名側の疑念を解消するための事情説明行為、幕府の処置の不可避性についての弁明行為、了解取りつけ行為として理解しうるのである。

さて、この改易理由の伝達行為については、江戸城などに諸大名を招集して、幕府老中から伝達されるのが基本形式であった。しかしながら、幾つかの変型が見られる。

元和八年一〇月の宇都宮城主の本多正純の改易に際しては、幕府は年寄筆頭の酒井忠世と土井利勝を上使として、黒田（筑前福岡五二万石余）・加藤（肥後熊本五二万石）・森（美作津山一八万石余）・池田（備前岡山三二万石余）・細川（豊前小倉三九万石余）の西国の五大名の江戸屋敷に派遣し、改易の事情説明を行っている。この幕府の処置に対して、細川忠利は「いつも加様之儀へ、惣様被<sub>レ</sub>召出、被<sub>レ</sub>仰聞候、此度ハ面々被<sub>レ</sub>仰聞候、人々被<sub>レ</sub>仰聞様替申候哉と存儀候事<sup>(58)</sup>」と、その父忠興に報じている。

右の文面からも、この種の改易問題については、諸大名が江戸城などに召されて、改易事情について幕府より伝達を受けるのが通例であったことが裏付けられているのであるが、ただし今回のこの個別伝達は異例であって、幕府が大名家ごとに事情説明の内容を違え

ているのではないかと、細川忠利が推測している点は興味深いところである。

このおりの事情説明の中にある、福島正則を改易したならば、大名一〇人ばかりが徒党して幕府から離反する云々のくだり（第一章「史料9」）は、確かに微妙な問題であって、大名家ごとに事情説明の内容を違えているものかとの推測は的確かもしれない。恐らくは、右の事情の故に、上使派遣による大名家ごとの個別伝達という異例の形式になったものであり、それは江戸城への諸大名招集による事情説明の変型と見てよいであろう。<sup>(59)</sup>

今一つの変型として、先述したように、幕府老中の奉書をもって事情説明を行うことがあるが、これは大名在国の場合の処置で、江戸城での諸大名への説明と同義と考えてよいであろう。<sup>(60)</sup>

なお、諸大名を江戸城などに招集して大名改易の事情伝達を行うことは、表1からすると無嗣断絶による改易については、寛永一〇年の堀尾家の場合以後は行われていないようである。無嗣改易は当然の法行為として、特に説明を要しないという態度を示したものと解すべきであろうか。ただしこれを補うかのように、無嗣改易の場合もそれまでのように完全断絶とするのではなく、親類の者に幾許かの石高を給して、家名の存続を認めるという処置を施している。<sup>(61)</sup>

## （2）幕府役人よりの私書状による事情説明

大名改易に関する事柄、およびその背景的な事情についての説明

は、右に見たような公式的な形によってだけではなく、他方では幕府役人より私書状の形でもって伝えられるようなあり方も見られた。

元和八（一六二二）年の最上家の改易に際しては幕府より諸大名に対して一般的な事情説明がなされていたが、先述した如く、小倉藩細川家の場合には更に、幕府年寄の土井利勝から自筆でもって、この事件についての事情説明を記した私書状の届けられていたことを知る。<sup>(62)</sup>

細川家文書で更に見るに、寛永九（一六三二）年の徳川忠長の高崎幽閉の事情については、幕府年寄稲葉正勝から細川忠利宛の私書状で伝えられている。<sup>(63)</sup> 同一七年の生駒・池田両騒動の顛末については、その詳細が旧幕府勘定頭の伊丹順斎から自筆の書状でもって細川忠利に伝えられていることを知る。<sup>(64)</sup>

万治三（一六六〇）年の伊達綱宗逼塞事件でも、阿波峰須賀家文書によれば、同家に対して幕府側衆の久世広之から詳細な事情説明のための書状が送られていた。「様子無く心元、可被思召」<sup>(65)</sup>と存」という趣旨で認められたものであった。

### （3）その他の伝達方式

右の二つの方式の他にも、幕府はやや略式ないし間接的な形で伝達も行っていた。

そのような諸大名への事情説明の中で興味深いものとして、寛永一五（一六三八）年の鍋島勝茂の詮議に関する事情説明がある。す

なわち、同年の島原の乱の鎮圧の際に、鍋島軍が抜け駆けを行ったことが軍令違反に問われて、幕府評定所においてその詮議がなされていた。この件について、同年七月一日に江戸城に月次登城してきた諸大名に対して、老中の土井利勝・酒井忠勝・阿部忠秋・松平信綱および大番頭松平勝隆の五人が出座し、「皆々不審、可被存候」という理由で、鍋島勝茂の評定所詮議の経緯を説明している。そしてこの伝達は公式のものではなく、「雑談」として述べる旨を断っている。<sup>(66)</sup> 蓋し、これは処分決定途中の経緯説明であり、幕府としても鍋島の改易までは考えておらず、ただ一般大名の間の不安・動揺を鎮める必要から、このような措置をとったものであろう。

幕府はまた、特に諸大名を招集して伝達するにはおよばないものとして、老中から幕府諸有司に対して事件の事情説明を施し、彼らを通して大名・旗本などへ間接的に情報が伝達されていくことを期待するようなものもあった。

万治元年一月三日、堀田正信改易につき執政方より詰衆・諸物頭に申し渡し<sup>(67)</sup>がなされている。次に万治三年、伊達綱宗逼塞事件でも世上の動揺を「氣遣」って、老中の酒井忠清と阿部忠秋とから江戸城内の諸役人に対してその事情説明がなされている。そして諸大名家では、その留守居役がそれら幕府役人から又聞きする形で、情報<sup>(68)</sup>が伝達されていく仕組みになっているのである。

寛永一五年七月の、島原の乱の責めをおって松倉重政が改易切腹



に処せられた際には、幕府の大老酒井忠勝の屋敷に諸大名家の留守居役が招集され、右の旨が伝達されている。<sup>69</sup>留守居役の制度や留守居組合のような情報伝達組織が発達してくると、このような非公式な形であっても、幕府側の事情説明・情報は充分に伝達・流通することになるであろう。しかしながら、これはあくまで非公式ないし略式の伝達方式と位置づけられていたようである。

## 第二項 改易実施についての事前了解の取りつけ

第一項のものは幕府が特定のだ名家の改易について、それを決定ないし発令したのちに、諸大名に対してその背景的な事情の説明をして、幕府の処置の正当性・不可避性についての了解を得ようとしたものであった。これは事後了承の形をなすものであるが、大名改易時において幕府の行う改易事情の公開は、一般的にはこの方式であった。

しかるに、改易に至る事情が無嗣断絶のような明白なものではなく、複雑錯綜しており、疑惑性が高く、かつ当該大名の改易が重大な政治的結果を招く恐れのあるようなものであるときには、改易の決定以前の段階で、諸大名に対して事態を公開し、それによって幕府の処置の正当化を訴えようとすることも行われていた。

その一つのあり方は、改易決定に際しての、有力諸大名に対する事前の了解取り付けである。これは第二章の、寛永九（一六三二）年の肥後加藤家の改易事件の過程で採られた幕府の処置の中に典型

的な形で見られる。

すなわち加藤忠広の嫡子光広が、家光政権転覆の「謀書」を発給したとの嫌疑について、幕府は同年五月二十四日、前田利常・島津家久・伊達政宗という外様国持大名の三巨頭を含む在江戸の有力五大名を、特に江戸城に召して、將軍家光みずから、問題となっていた「謀書」の実物を五大名の前に披瀝し、そのうえで加藤家を嚴重処分すべき旨を述べているのである。傍らに控えていた井伊直孝もまた、これを受けて、かような不屈に対しては断固たる処置をなさねばならない旨を述べたのである。

ここでなされている幕府の処置は、単なる加藤家の改易の宣告というものではない。加藤家改易の一般的事情説明は、改易発令後の六月一日に江戸城において、月次の登城出仕してきた諸大名に対して行われているのである。それ故に、この有力五大名に対する措置はそれと全く性質の違う特別のものなのである。

そこでは、加藤光広の「謀書」発給という疑獄的な響きのある問題について、それが虚説でもなく、また幕府による捏造でもないことを明らかにすべく、敢えてこの「謀書」の実物を五大名の前に提示して、それを踏まえて加藤家に対する嚴重処分の意向を述べているのである。それ故に、これは単なる改易発動の通告というものではなく、証拠開示による幕府の判断の正当性・不可避性についての立証行為であり、改易発動についての事前の了解取り付け行為とし

て理解すべきものと考ええる。有力五大名を特に選んで行っているところに、幕府の処置への理解と協力を要請する意味合いが示されているといえる。

この事前の了解取り付けについては、元和五年の福島正則の改易事件においても、同様の手続きを見ることが出来る。同年の四月二五段階では、城郭無断修築の件をもって、幕府は福島正則の改易を実施すべく、一応決断していた模様である。そしてそのために、幕府は東国の有力三大名、上杉景勝・伊達政宗・佐竹義宣の三大名を召して、その「請合」をとるべく予定していたことである。しかしながら第一章に見た経緯の如く、この問題については福島側が広島城を破却する条件で、無断修築の件は一旦宥免に至っており、このために右の措置は取り止めとなった由である。即ち、幕府はこの三家の老臣に対して「曲事<sup>19</sup>被仰付儀候ハ、三人之衆被召出、御請合可被成置候得とも、御用捨被成置候間、不<sup>20</sup>被召出候」の旨を伝えている。

右において予定されていたことは、福島改易についての「請合」が東国の三国持大名と特定されていることからして(西国大名については不明)、単なる改易事実の伝達ではなかったと推測される点に注意されねばならない。すなわち、それに至る前段階の措置であり、幕府の改易決定過程の中に含まれた、手続き的行為として捉えられるべきである。すなわち幕府の改易政策の発動についての事前

了解の取り付け行為であり、ひいては幕府の施策への支持取り付けの行為として理解すべきものではないかと思われる。

天和元(一六八二)年の越後騒動による越後松平家の改易については、後述するところであるが、同家が結城秀康の嫡統として徳川一門中の枢要の家柄であるだけに、將軍綱吉はその処置について尾張家の徳川光友と事前に相談している。そして後者から「能々御思案、御尤奉存候」との具申を受け、この問題への慎重な対応を迫られている。<sup>21</sup>恐らくは、この尾張光友の意見具申が、本問題の処置を次項に見るような、公開の場での問題決着という手順へと進ませていったものではないかと思われる。

### 第三項 御前公事への大名陪席

大名改易に際しての、諸大名への事前の事態・事情の公開については、前項の有力大名に対する事前の了解取り付けのほかに、御前公事への大名陪席というあり方があった。

そもそも特定大名家の事件・騒動についての御前公事、およびそれへの大名陪席という事実については、これまで幕藩体制論の中で看過されてきた重要問題の一つなのである。

特定大名家に関する事件や家中紛争が発生し、幕府の審理に入った時、通例は幕府の評定所や幕閣の役宅に関係者を召喚して、事件の吟味取り調べを行い、証拠・証言を取り揃え、また紛争当事者(22)を対決せしめて正否の裁定を下した。

そしてより重大な政治的事件においては、江戸城に関係者を召喚し、將軍親裁の下で審理を行った。これが御前公事である。<sup>(73)</sup> 寛永一二(一六三五)年に発生した対馬宗家の柳川騒動は御前公事にもちこまれた大事件の一つであった。

同事件は周知の如く、徳川將軍と朝鮮国王との往復国書の文字の改竄を巡って、宗義成とその家臣柳川調興との君臣抗争を内容とするものである。<sup>(74)</sup> この御前公事に際しては諸家の史料に、「登城して様子可被<sub>レ</sub>聞召<sub>二</sub>之通<sub>一</sub>、御触御座候<sub>二</sub>」<sup>(75)</sup>、「諸大名衆、不<sub>レ</sub>残、被<sub>レ</sub>罷出<sub>二</sub>御直<sub>二</sub>対決被<sub>レ</sub>聞召<sub>二</sub>」<sup>(76)</sup>とあって、同年三月十一日に御三家、伊達政宗、前田利常、島津家久、毛利秀就、細川忠利らを含む在江戸の諸大名は残らず江戸城に招集され、柳川一件の御前公事に陪席して、その裁判の模様を目のあたりにしたのである。

幕府は右の過程を踏まえて、その翌日一二日に再び諸大名を江戸城に招集し、柳川調興の津輕配流と、国書改竄に関わった松尾七右衛門父子の処刑、および宗義成の無罪・本領安堵を発表している。<sup>(77)</sup>

この柳川騒動は、結果的には、大名改易には至らなかったが、その可能性を孕んだ重大事件であった。また国書改竄という国際問題上の重大事件でもあった。そしてかかる重大事件の御前公事に、諸大名を陪席させることで事態の実情を公開し、それでもって幕府の処置の公正性・正当性についての信頼を確保しようとする政治手法は注目されるところである。幕府政治には、このような公開主義に

基づく支持取りつけ、同意取得といった側面が、少なからず存するのである。

この問題は、寛永七年頃から始まった筑前黒田家における黒田騒動についても関係するところがある。同事件は、黒田長政以来の家老である栗山大膳と、新しい世代の藩主黒田忠之との確執を内容とする、典型的な初期御家騒動、君臣抗争事件である。<sup>(78)</sup> 両者の反目、抗争は武力衝突の危機を迎えており、更には幕府関係者が仲裁を試みるも対立は解けず、栗山は終に黒田忠之に謀叛の疑いありとして、幕府に提訴するに至った。

事件の審理は幕府評定所において行われたが、柳川騒動の際のような君臣両者の直接対決は、この事件の裁判過程の中には見られなかった。この事件は結局、栗山の訴えについては、「黒田忠之には不敬の廉はあるものの、謀叛の疑いはなし」と裁決され、栗山は奥州南部へと配流となった。そして黒田の領地については、そのまま忠之の支配に委ねられている。

この件について、『大猷院殿御実紀』付録巻二には、忠之と大膳とが將軍家光の御前での公事を行い、しかも諸大名をこれに陪席せしめたとの記事があるが、これは自余の同時代史料に徴するならば、信じることはできない。本件については、家光は忠之に対して御前公事で決着をつけるべきことを勧めたが、忠之がこれを強く拒絶し、臣下と公然対決すべきぐらいなら、寧ろ切腹を命じられたい旨を述



べたために、御前公事が見送られたとする『校合雜記』の説が信頼性が高いように思われる。<sup>(79)</sup> 実際には実現しなかったのであるが、この黒田騒動に関しても、御前公事や更には、それへの諸大名の陪席が想定されていたということは、これらの事柄が近世の国制において、ことさら特異なこととはされていないことを示すようである。

諸大名陪席の下での御前公事が、大名家の改易に至ったものとしては、天和元（一六八二）年、越後松平家のいわゆる越後騒動を挙げることができる。

越後松平家は、秀忠將軍の兄筋の結城秀康の嫡統を嗣ぐものとして、徳川一門中でも屈指の家柄を誇っていた。同家では藩主松平光長の妹婿でもあった筆頭家老の小栗美作正矩が、光長の信任を得て藩政の実権を握り、また領内政治にも顕著な業績をあげて確固たる地位を築いていた。このような時、藩主光長の嫡子綱賢が病死をしたところから、俄に後継者問題が起った。<sup>(80)</sup> 後嗣には光長の異母弟であった永見市正長頼の子万徳丸が挙げられたが、小栗美作の子掃部（母が光長妹）も光長の甥として後継有資格者と目され、ここから小栗派と反小栗派との権力闘争が顕在化していった。反小栗派としては、故永見市正の弟の永見大蔵や七大将次席の荻田主馬、および八五〇余名の血判誓詞を認めた譜代家臣があった。そして小栗派一三〇余名がこれと対峙して、あくなき藩内抗争を繰り広げていた。

延宝七（一六七九）年、幕府は永見大蔵・荻田らを家中人心を惑わすものとして、他家御預けに処したが、これは小栗派が幕府大老の酒井忠清を動かした結果の、片落ちで不正な処分として非が唱えられた。そして翌八年に將軍が家綱から綱吉に代替わりしたのを機に、同事件の再審が開始された。

評定所での取り調べを経たのち、同事件は天和元年六月二日、江戸城における將軍綱吉の親裁という局面を迎えたのである。そしてこれには、徳川御三家、甲府宰相綱豊、そして在府中の譜代大名、また幕府の番頭以下の諸有司が招集され、彼らの陪席の中で御前公事が進められた。<sup>(81)</sup> 柳川一件の時と異なり、この公事陪席には外様大名は除外されているが、これは対象の事件が徳川一門に関わるが故のものとして理解してよいであろう。

さて、図4は<sup>(82)</sup>この折りの参集者の配置・座席を示したもので、御前公事場の模様、および諸大名の陪席の具体的なあり方を伝えるものとして貴重である。裁判には、江戸城大広間が使われ、將軍はその一の間中段に着し、公事の当事者たる小栗美作と永見大蔵・荻田主馬の三人は、この一の間縁側にならぶ。幕府老中のうち審問など公事運営を直接担当する堀田正俊と阿部正武は、將軍を背にして下段の奥に位置し、稲葉正則・大久保忠朝の両老中は二の間に控えている。更に元老待遇である溜間詰の井伊ら四大名が列座して、老中の公事進行を輔佐する形をとっている。

さてこの御前公事に陪席する諸大名は、御三家と甲府綱豊が一の間下段のやや特別の席を与えられ、自余の諸大名は大広間の二の間、三の間に着座して、裁判の始終を傍聴するという形をとる訳である。裁判は、小栗と反小栗両名の審問と双方の非難の応酬に終始するものであったが、御前公事の終了後、將軍綱吉は御三家と甲府綱豊に向かつて、「三人之者共、不届にくき者共（83）候」との意見を述べ、御三家らはこれに対して「上意之通」の由の挨拶返答をなした。以上のような手順を踏んだのち、同月の二二日に小栗父子の切腹と永見・荻田らの八丈島遠島、そして同二六日に越後松平家の改易と領地収公が発令されたのである。

御家騒動が一向に止む気配のない越後家ゆえに、その取り潰しは、將軍綱吉の意向としては早くからあったようである。しかしこの意向に対しては、先述の如く、御三家筆頭の尾張光友が越後家の家柄を顧みてのことであろう、「能々御思案、御尤奉存候」と強く再考を促しており、綱吉としては独断で問題を処理し難い情勢にあった。そこで綱吉は、この事件を徳川諸大名に公開して、越後家の内部抗争が解決不能な程に根深いものであり、それ故に改易が不可避のものであることを示し、將軍の恣意・横暴の非難を避けるとともに、幕府の処置の公正さ、正当さについての支持と了解を取りつけようとしたものと考えられるのである。

## 第二節 戦争行為としての城地受け取り

幕府から大名の改易が発令されても、それで直ちに当該大名の領地と居城が幕府に移管されるものではない。それは軍事的に、「力」でもって奪取せねばならぬものであり（軍事的接收）、大名改易の執行過程は、それ故に戦争行為としてある。それは統一国家における地方行政官の解任と役所・管轄区域の引き渡しとは、根本的に異なる性格の行為なのである。<sup>（84）</sup>

大名改易における城地の受け取りが戦争行為としてあることは、これまでも指摘されてきたところである。本稿はこの点を再確認するとともに、それがどのような形態・性格の戦争行為であるのか、そして城地の受け取りは具体的には、どのようなあり方をもつてなされるものであるかを、さらに明らかにしていくことが課題である。というのは、大名改易の実現過程が戦争行為としてあるといっても、実際に交戦状態に入ったのは、豊臣秀頼を対象とした大坂冬・夏の陣の折りのみであって、自余の大名改易に際しては、軍隊は派遣されても交戦状態には至っていない。

すなわち大名改易時の城地受け取りが軍事的行為であり、軍事的に奪取されるものといっても、それは幕府の大軍が派遣されたならば、その圧倒的軍事力の前に戦闘を勃発させることもなく、問題なく城地の引き渡しがなされていくものという漠然とした理解が、こ

れまでなされてきたようである。そしてそのことはまた、軍事的抵抗を施すこともなく城地を放棄する近世大名と、不可抗の絶対権力としての徳川将軍という神話を、一方では増幅してきたように思われる。

しかしながら、それはこの問題についての適切な理解であろうか。大名改易の執行過程、すなわち改易大名の城地の接收のあり方と、この改易執行過程の政治的意味を考えていくのが本節の課題である。

#### 第一項 城地受け取りのための軍事動員

大名改易が発令されると、幕府は当該大名の居城と領地の接收をするための要員を選定し、現地にこれを派遣する。要員は、幕府側の人員と接收城地の周辺諸大名から動員されるものとなる。

寛永九（一六三二）年の肥後加藤家改易時の、熊本城以下の受け取りの要員について見てみよう。まず幕府側人員は次のような構成になっている。<sup>(85)</sup>第一に「上使」、これは將軍の名代であり、この時には幕府老中の一人で、將軍家光の信任の最も厚い稲葉丹後守正勝が選ばれている。次にこの大名改易という事柄の刑事的・軍事的性格からして「目付」が全体の監察をなすべく任ぜられている。秋山修理亮正重・曾我又左衛門古祐の二名。次に伝令役としての「使番」で、石河三右衛門勝政、朝倉仁左衛門在重の二名。そして改易に伴う会計的業務、すなわち所領や城米金の算用、および鄉村高帳・算用帳などの諸帳簿の引き渡し業務のために、勘定方役人が同

行する。「勘定頭（勘定奉行）」の伊丹播磨守康勝一名、「勘定役」能世四郎・諸星満右衛門の二名、といった構成である。

そして城地受け取りの総指揮をとる上使稲葉正勝は、自からの手勢として、騎馬一三〇騎、弓・鉄炮五〇〇挺、総勢三〇〇〇人の軍勢を率いて、江戸より遙か肥後国熊本まで赴くのである。

勘定頭の伊丹播磨守康勝と、内藤左馬助政長（陸奥平七万石）・石川主殿頭忠総（豊後日田六万石）は肥後国の国政を沙汰すべく、有馬左衛門佐直純（日向延岡五万三千石）は熊本城の在番を、それぞれ命ぜられる。<sup>(86)</sup>

これと共に、肥後国周辺の諸大名が軍事動員をかけられる。松平右衛門佐忠之（筑前福岡五二万石）・細川越中守忠利（豊前小倉三九万九千石）・松平長門守秀就（長門萩三六万九千石）・鍋島信濃守勝茂（肥前佐賀三五万七千石）・中川内膳正久盛（豊後岡七万石余）・秋月長門守種春（日向財部三万石）・島津右馬頭忠興（日向佐土原三万石）・相良左兵衛長每（肥後人吉二万石余）・伊東修理大夫祐慶（日向飫肥五万七千石）・木下右衛門大夫延俊（豊後日出三万石）の一〇大名である。彼らはそれぞれに軍役人数の定に従って軍隊を派遣し、肥後の国境を固め、これを包囲する態勢を整えるのである。

大名改易に伴う城地の受け取りは、このような形での軍事出動として執行されることになるのである。

## 第二項 籠城と開城

第一項に見たような数の幕府軍および動員された周辺大名の軍勢によって包囲される中で、改易大名の城地の接収が行われる。このように大名改易の執行過程が、軍事的行為として遂行されるものであることは、これまでも指摘されてきたところであるが、他方この軍勢を迎え受ける改易大名家側の対応については言及されることがなかった。だがこの城地接収の執行過程の中に、極めて重要な軍事的契機が含まれているのである。

この問題を先ず、元和五年の福島正則の改易に伴う、その居城広島城と安芸・備後の領国の接収の過程について見てみよう。福島は、將軍秀忠が当時上洛中であったために、伏見城で六月一日に発令されたが、正則は江戸屋敷に止めおかれていたために、牧野駿河守忠成と花房志摩守正成が上使として江戸に下向して正則に芸備両国の収公を伝達した。

他方、現地へは幕府年寄（老中）の安藤対馬守重信と永井右近大夫直勝の兩名を上使とし、広島城の受け取りには酒井宮内大輔忠勝（越後高田一〇万石）と本多縫殿助康俊（近江膳所三万石）、その在番に本多美濃守忠政（播磨姫路一五万石）が派遣され、周辺の大名としては加藤左馬助嘉明（伊予松山二〇万石）・森美作守忠政（美作津山一八万六千石）・松平阿波守至鎮（阿波徳島二五万七千石）・松平宮内少輔忠雄（備前岡山三八万石）・生駒讃岐守正俊（讃岐高

松一七万三千石）・松平土佐守忠義（土佐高知二〇万二千石）らが動員されて、芸備両国を包囲する態勢をとった。<sup>(87)</sup>

これに対して福島家臣団は籠城で抗戦の構えをとった。藩主正則は江戸にあり、その嫡子正勝も京都にあったが、国家老福島丹波の総指揮の下に福島家臣団は籠城態勢にはいった。広島の本城では正則の奉行であった吉村又右衛門や大橋茂右衛門らが指揮官となって、福島家臣四千余人が籠城した。更に芸備両国の各支城も臨戦態勢に入り、三原城を梶田出雲、鞆ノ城を大崎玄蕃、神辺城を福島丹波、三吉城を尾関監物、東条城を長尾隼人がそれぞれ守備して、幕府軍の両国侵入を阻止した。

安藤・永井の両使は備中国笠岡から広島に使いを送って、城を退いて明け渡すべきことを求めた。福島側の城將吉村・大橋の兩名は鉄炮足軽百人余を率いて、広島外港の音戸の瀬戸まで出向き、ここで瀬戸内海沿いにやってきた安藤・永井両使と会見した。吉村・大橋の兩名は、たとい將軍の命なりとも、居城の留守を預かるうえは、主君正則の直命なくして城の引き渡しはありえず、開城を求めるとあらば、開城引渡しを命ずる旨の正則自筆の書付をもたらしすべきことをその条件とした。<sup>(88)</sup>

安藤・永井の両使は、遙か遠方の江戸から正則の手書を取り寄せることの困難から、これに難色を示したが、福島側はこの条件を譲らなかった。幕府側には実力攻撃の意見もあったが、結局、江戸に



使いを送って正則自筆の開城指示の書付が取り寄せられた。この時の正則の手書の控えは、今に残されている。次のものである。

〔史料18〕 福島正則の開城手書（「森田完氏所蔵文書」『大日本史

料』第二編 元和五年六月二日条）

為御使「牧駿河殿、花房志摩殿御下候而、上意之趣被仰聞候、今度広島普請仕候付而、両国被召上ヶ、則さかい宮内殿、本田縫殿殿、広島・三原御請取御越候間、急度御両人様へ渡可申候旨、其方留守居之者共可申遣候、兎角牧主馬を下し候而尤候、為替地「鶴河候」<sup>（津堅）</sup>

六月十四日

左衛門太夫  
はん

備後守殿

この文書の宛所は嫡子備後守正勝になっているが、これは何人が広島籠城の総指揮をとっているか不明であったが故であろうか。ともあれ、この正則自筆の開城の墨付が広島にもたらされ、城将以下がこれを披見して承知し、広島城を始めとする福島領の城地が異議なく幕府側に引き渡されたものである。<sup>（89）</sup>

この藩主手書こそが、この軍事的問題の決着の極め手となっているのである。籠城した福島家臣団は、包囲の幕府軍の圧倒的軍勢の前に無抵抗で屈服したのではなく、藩主の直命を待っての開城引き渡しという、名誉ある撤退をなし遂げることができたのである。

因に、この福島家臣団の籠城と藩主手書を受けての整然たる撤退の全体的な指揮をとったのは、筆頭家老の福島丹波であるとされ、彼の武名は一躍天下に響きわたって、福島家断絶の後は各地の諸侯から再仕官の招請が相次いだものである。尤も、彼は隠棲し、再び主取りをすることはなかった。また、広島本城の籠城指揮をし、幕府上使とわたり合った知行千石の物頭大橋茂右衛門は、第一章の注20に記したとおり、福島家断絶のちは松江松平家に六千石の高禄で召し抱えられ、同家の永代家老の榮譽まで与えられた。この破格の好遇は広島籠城戦での水際立った振る舞いにより、これまた武人としての誉れを輝かしたが故のものであった。

福島家臣団は芸備両国の城地の引き渡しに際して、籠城臨戦態勢をとって幕府軍の領国への侵入を阻止し、藩主の開城指示の手書を取り寄せてのち整然と開城撤退するという、遺漏なき処置によって天下にその武名を挙げることができた。そしてここで重要なことは、この福島家臣団の挙動進退は誠に厳正にして理に叶い、武士の面目を施し、また家臣の本分を尽くしたものと見なされたために、それは後代に対して、大名改易時の家臣団のとるべき行動についての範型を提供することとなったのである。

すなわち、寛永九年の肥後加藤家の改易に際しても同様の事態が生じた。加藤家の改易と忠広・光広父子の配流が江戸で発令されると、国元の家臣団は熊本城に集結して籠城の構えをとった。隣国豊

前小倉藩の細川三斎はその状を聞いて、これを「此以前福左太身上被<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>御果シ<sub>一</sub>候時、福島丹波仕様奇特と諸人申候つる間、其ごとく<sub>二</sub>隈本之留守居も仕物と存候<sub>一</sub><sup>(90)</sup>と見なしており、藩主細川忠利も豊後岡藩主の中川内膳に宛てて、「不<sub>レ</sub>残居城へはいり候由、それハ左様ニ可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>御座<sub>一</sub>候、先渡候へと肥後方<sub>ハ</sub>被<sub>二</sub>申越<sub>一</sub>迄ハ左様ニなく候て不<sub>レ</sub>叶儀ニ候事<sup>(91)</sup>」と述べているところからも、籠城と藩主手書等待つの開城引き渡し、大名改易時の国元家臣団の取るべき当然の行為、作法として確立されつつあることが知られる。

幕命が如何にあらうとも、これに抗して国元家臣団が城地を死守するのは当然のことであり、藩主よりの手書が到来するまでは、籠城態勢をとって幕府軍による城地の接收を阻止すべきであるとするのが、幕藩領主を含む武家社会全体の共通見解となっていきつつあったのである。

こうして大名改易時の国元家臣団の行動規範、作法が右のような形で確立され、後代に至るもこれが貫徹されていったのである。<sup>(92)</sup>

寛文年間に丹後宮津の京極家で起こった京極騒動は、藩主高国とその父で隠居の安智斎との確執と、家中の紛争を内容とするものであった。長年に亘った騒動は解決することなく、終に寛文六(一六六六)年に幕府より改易されるに至った。<sup>(93)</sup>だがこの折りにも、国元家臣団は籠城した模様であり、宮津城の開城引き渡しを指示する藩主高国の次のような手書が発せられている。

〔史料19〕 寛文六年五月 京極高国の宮津城開城手書〔武家殿

制録〕二〇〇号

一、丹後守家来え遣之自筆之状

上使之面々御着以前、家中井町在々迄騒動不仕様、急度可申付候、上使於<sub>二</sub>到着<sub>一</sub>は、城之儀は不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>申候<sub>一</sub>え共、從<sub>二</sub>其差図<sub>一</sub>、早速引渡可<sub>レ</sub>申候、然は今度之仕合不調法故、家中之者可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>流牢<sub>一</sub>と、不便不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>是非<sub>一</sub>候、此旨侍中可<sub>レ</sub>申聞<sub>一</sub>者也

五月六日

京極丹後守高国判

落合主税殿

沢 図書殿

伊木七郎右衛門殿

中江民部殿

更に天和元(一六八二)年の越後騒動の折りにも、この作法が確認される。越後家の改易が発令されるとともに国元家臣団は籠城の態勢に入り、高田城の引き渡しについては、「越後守様御書拝見不<sub>レ</sub>仕内は相渡間敷<sup>(94)</sup>」の旨を唱えていた。これに対して次のような藩主光長の手書が送られた由である。

〔史料20〕 天和元年六月 松平光長の高田城開城手書〔会津藩

家世実紀〕同年六月晦日条

以<sub>二</sub>上意<sub>一</sub>、越後領分被<sub>二</sub>召上<sub>一</sub>候、依<sub>レ</sub>之、松平日向守殿・秋元

国谷村五万八千石

攝津 守殿、高田并糸魚川両城、御受取可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候間、無<sub>二</sub>相違、可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>相渡<sub>一</sub>候、恐々

六月晦日

越後中将光長

片山主水との

山崎九郎兵衛との

このように大名改易時の、国元家臣団の籠城と開城についての進退は、武士道上の作法として厳格に遵守されていたのである。<sup>(95)</sup>幕府もまたこの行動については、福島家の事件を先例として、踏襲的に受け入れていった。こうして城地の接収という大名改易の執行過程は、幕府権力の一方的貫徹、力尽くの制圧行動としてではなく、籠城抵抗を示す家臣団との折衝、大名領有権に対する尊重、この過程全体に互る厳格な作法、手続きを踏まえての実行、そして籠城家臣団の名誉ある撤退というあり方をとることになったものである。福島家臣団は、大名改易という近世の国制にとって最重要の問題において、このような慣行的制度をその実現過程の中に具備せしめるに至ったものであり、その歴史的意義は十分に特筆に値するものであると考える。

## 結 語

本稿は、近世の大名改易についての、従前の歴史像を再検討する

ことを課題としてきた。幕府による大名改易を、政略的にして権力主義的なものと見做す理解こそが、近世社会一般についての従前の歴史像、すなわち將軍権力の圧倒的強大性、大名以下の武家領主の存在を意のままに操作しうる不可抗の絶対性としての「將軍專制」、あるいは封建的土地所有権の將軍への帰属という歴史像を生みだしてきたところの、主要な根拠であったといえるであろう。

本稿はこのような大名改易についての従前の理解に対して、専ら事実関係の面から、その修正を求めるものである。それは主として、以下の三つの問題からなっている。

一、改易の原因とされた事件の内容、その実態についての理解。

ここでは大名改易の原因事実についての従前の理解、すなわち、大名改易が幕府の既定の方針の実現としてあるとする見方、幕府によって意図的かつ操作的に遂行されていく大名取り潰し政策として捉える認識が問題である。

大名改易の従前の認識形成に大きく貢献したのは、元和五（一六一九）年の安芸広島四万八千石の福島家、寛永九（一六三二）年の肥後熊本五万石の加藤家の両改易事件であった。この両事件に基づいて、従前の改易像が作られたのには無理からぬところもあった。

すなわち、(1)両家はともに豊臣秀吉恩顧の代表的な大名家であって、徳川幕府にとっては潜在的な敵性勢力として考えられうること。

(四)両家の改易によって、ともに五〇万石からの封地を幕府の下に収めることができ、しかも共に西国の戦略的要地である広島・熊本に親幕府勢力を送りこむことで、幕府の全国支配力が飛躍的に高められたこと。(五)この両豊臣系大名の改易がともに、秀忠・家光の両將軍の親政開始直後に発生していることからして、將軍の武威を顯示する目的をもって、幕府側から意図的に働きかけた結果のようであること。(六)両改易の原因とされた事件の内容が共に曖昧ないし異常なものであって、疑獄的な印象を強く与えるような性格のものであること。

これらの諸点よりして、両者の改易は幕府にとつての既定方針の実行と見るべきものであり、共に、將軍親政の初頭において強行された、外様大名威圧政策に他ならぬものとされてきたのである。

しかしながら第一章に見た如く、福島正則の場合については、(イ)まず、改易の原因となった広島城の無断修築の件については、当時の第一次史料からして、正則は幕府側に許可を求める兆しもなく、少なくとも二回に亘って城郭の修築を早くより行っていること。(ロ)幕府側はこれに対して、年寄の本多正純らは寧ろ、問題を穏便に片づけようと努力していたと見なしうること。しかしながら本問題の宥免条件の不履行という事態を迎えて、幕府としてはその威信を堅持するうえから、やむなく改易の実行に踏み切ったという性格のものであること。

寛永九年の肥後加藤家の改易事件は、加藤忠広の嫡子光広が、家光政権転覆の「謀書」を発給したことを理由とするものであった。しかしながら、これも同時代の第一次史料が示す如く、光広が右の内容の「謀書」を発給したのは動かし難い事実なのである。そしてそれは、単なる戯事として片付けるには、当時の政治状況からして余りに重大な事柄であった。光広個人の処罰で済ませるのも考慮の一つではあったであろうが、加藤家そのものの改易に至っても、事柄の性格上やむを得ないものであり、当時の世上の受けとめかたも、そのようなものであったと思われる。

近世の大名改易を論ずる際には必ずといってよい程に取り上げられ、その歴史像の形成の主要根拠となってきた両事件であるが、以上のように、それは幕府の側からの政略によるものでもなければ、些細な事柄を、理不尽にも、改易理由にまで仕立てた権力主義的な強圧政策ということも出来ないのである。

二、改易の決定過程。ここでは幕府による、一方的な命令強制としての改易発動という先入観が支配的であった。大名改易は、幕府が独自に判断して決定し、これが当該大名に申し渡され、そして公表されていくものという自明性の予断があり、この大名改易の決定過程の権力論的意味について検討を加えるという関心が、そもそもこれまで存在しなかった。

大名改易の決定過程を見た時、それは外部に対して秘密主義的に

臨むのではなく、第三章第一節に述べた如く、様々な形をとっての事情説明を寧ろ積極的に行っており、それによって幕府の施策に対する了解と支持を取りつけようとする姿勢が顕著に見られるのである。よって敢えてこれを、改易事情の公開の原則と呼ぶものである。

肥後加藤家の改易時における「謀書」の有力五大名への提示や、御前公事への大名陪席という措置は、改易事情の「公開」と評価しうるものであろう。また改易の事後的説明であっても、安芸福島家や会津加藤家の改易事情の説明は、その背後の経緯の詳細にまで立ち入ったものであり、改易事実の単なる公表というものよりは、寧ろ「公開」——今日の意味での「情報公開」とはもとより異なっただものではあるが——と形容できるような性格の行為ではないかと考える。

三、改易の執行過程。改易大名の居城と領地の接收に際しては、幕府の命令の下に大規模な軍事力が動員されるならば、問題なくその執行がなされることは、これまた自明のこととされ、この執行過程についての立ち入った検討は行われてこなかった。だがここにも、極めて重要な権力論的問題が伏在していたのである。

改易大名家の城地の接收は、幕府の軍事力による力尽くの制圧行動としてではなかった。大名家の家臣団は、幕府の軍事力に対しては死守の構えで籠城態勢をとり、些かも屈するところはなかった。そしてこの軍事対立を解決するものは、ただ改易大名自身の

開城指示の手書なのであった。

この形を明確に打ち出したのは、福島正則の家臣団であった。そして幕府正史の『徳川実紀』もまた「福島が家人どもの挙動厳正なりと世もって称歎」と明記するところであって、それは大名改易時に家臣のとるべき態度として、広く武家社会にその範型を示し、幕府もまたこれを受け入れていったものである。

改易大名の城地の接收に際して当該大名の手書が必須の条件をなし、これをまっぴらして始めて開城引き渡しが可能となるという作法・慣行が近世武家社会において確立されていたということは、また同時に、次の問題を提起することとなっている。

即ち、諸大名の城と領地は、徳川将軍から宛行われたものという知行形式を持っているが、このことは必ずしも、それら城地が将軍に専一的に帰属することを意味してはいないということである。改易大名の城地の引き渡しに際して、当該大名の引き渡しの指示なくしては、将軍の命をもってしてもその執行を実現しえなかったという事実は、将軍のもつ全国全領土に対する領有権、あるいはその政治的支配権なるものが、限定されたものであったことを証示することになるであろう。将軍の全国規模での領有権、支配権なるものは大名の存在を媒介とせずしては、その大名の支配下にあるものに対しておし及ばしえないという関係が、逆説的なことながら、この大名改易の執行過程のあり方を通して確認されることとなっているの

である。<sup>(96)</sup>

徳川幕府による大名改易政策の性格について、以上の点を指摘したい。そしてそれは自ずから、大名改易についての従前の理解を踏まえて定立されてきた、近世の国制の歴史像についても再検討の必要を提起するものと考ええる。

# 注

- (48) 姫路市立図書館蔵。ここでは国立史料館の写真紙焼版(史料番号P八〇〇八―四)を使用している。
- (49) 国立公文書館内閣文庫蔵、「寛永録」(史料番号一六三―一九二) 寛永二〇年五月三日条
- (50) 京都府淀稻葉神社蔵
- (51) 前掲「寛永録」同日条、藤井駿他編『池田光政日記』(国書刊行会 昭和五八年) 同日条など
- (52) 斎木雪村「会津騒動」(国史講習会編『御家騒動の研究』)、徳富蘇峰『近世日本国民史・徳川幕府統制篇』
- (53) 藤田寛「寛永飢饉と幕政」一・二(『歴史』五九・六〇輯)
- (54) 前掲「史料7」に見えるが如く、福島正則が広島城破却の詔言をなして、一旦宥免に至った折りにも、幕府はこの事情を伝達すべく、京都所司代の板倉勝重に対して「何茂無心元可被存候間、被相尋候衆へへ、右之段可被仰遣候」という指示をしている。
- (55) 元和八年九月一五日付、細川三斎書状(『細川家史料』三四六

号)

- (56) 細川家文書(藤井讓治『江戸幕府老中制形成過程の研究』第二編九八号文書、校倉書房 平成二年)
- (57) 拙著「主君「押込」の構造―近世大名と家臣団―」(平凡社 昭和六三年) 九〇頁
- (58) 元和八年一〇月二一日付、細川忠利披露状(『熊本県史料』近世編第一冊、四〇四頁)
- (59) 本多正純の改易事情の伝達は、東国大名には江戸城招集による一括伝達方式でなされているが、これは福島事件の折りに想定された「大名十人ばかりの徒党離反」云々の大名が、福島と同類である西国の豊臣系大名を指すと見なされたからであろう。
- (60) 寛永九年六月三日付、幕府老中連署奉書「細川忠利宛」(前掲藤井著、第二編八三号文書)
- (61) なお無嗣断絶による大名改易に際しての幕閣内の論議の様子が、寛永一四年の出雲京極家の事例について伝えられているので、参考として掲げる(『明良洪範』国書刊行会 二四〇頁)。  
この出雲京極家の場合、藩主京極忠高が寛永一四(一六三七)年六月に死去したが、実子がなく無嗣断絶という族制的理由によつて出雲・隠岐両国二六万四千石が収公され、甥の京極高和に新たに六万石が給されたものである。この決定過程は次のようなものであった由である。  
即ち、京極家は近江の佐々木源氏の流れを汲み、この無嗣除封によつて「名家数代の祀」の断絶することを惜しんで、家名相続のために甥高和に、京極氏の近江国大津の本領分である六万石ほどを給しようという案が出され、これを巡って幕閣での評議とな

老中酒井忠勝の意見は次のとおり。今回の京極家に対する処置は、昨寛永一三年に同じく無嗣除封で出羽山形二二万石を収公され、藩主の弟に三万石を給して家名の存続を認めた鳥居家の場合に準じた処置のように見える。京極家と鳥居家とは関ヶ原の戦いの折りに、共に畿内にありながら徳川方に立って戦い籠城したが、鳥居元忠は伏見城で討ち死にしたのに対して、京極高次の方は大津城を開城している。鳥居家はその父祖の旧功によって、昨年藩主鳥居忠恒の死去で無嗣除封の時も、その弟の忠春に三万石を給したが、今度京極に六万石を給するのは過分である、としている。幕府の元老格である井伊直孝はこれに反論して、討ち死に・開城に勝劣ないこと。また家格を論ずれば、京極家は佐々木源氏の一統にして、徳川家とはもと同格同流の大名。鳥居は三河譜代であつて、たとえ子孫はいか様に召し使われ、領知召し上げられて扶持米ばかりとなつても異議は唱えまじき家柄である。しかるに父祖の旧功を思ひ召して、鳥居彦右衛門の本領高の程を忠春には賜つたものである。よつてこれに準じて、京極に大津の本領高六万石を給するに、諸侯と譜代と格式異なるうえに、旧領といひ「誰か批判すべき」と主張した。結局この井伊直孝の意見が採用されて、京極高知に播州竜野で六万石が給されたものである。ここでも理に叶ひ、世間の納得と支持を期待できるような処置が、幕閣の間で模索されている様子が読みとれるであらう。

(62) 元和八年九月一日付、細川三斎書状「忠利宛」(「細川家史料」三四六号)

(63) 寛永九年十一月五日付、稻葉正勝書状「忠利宛」(「熊本県史

(64) 寛永一七年八月一六日付、細川忠利書状「伊丹順斎宛」(熊本県史料「近世篇第二、一九七頁」)

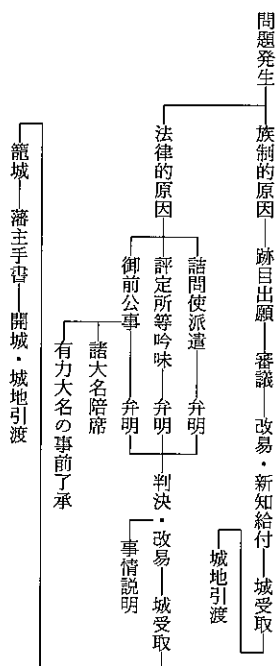
(66) 寛永一五年七月二日付、山内忠豊披露状「岩崎又右衛門宛」

(67) 一(酒井本)幕府日記〔国立史料館、史料番号P八〇〇八—四六〕

(69) 寛永一五年七月二日付、柴田覺右衛門等連署披露狀〔岩崎又右衛門宛〕（山内御手許文書）

(71) 『松平大和守日記』天和元年五月二七日条(三一書房 昭和五二年)

(72) 大名改易は図示をするならば、大体において、次のような手続  
きで実現されていくと考えられる。



なお一万一千石余で伏見奉行を勤めた小堀氏の改易について、その経緯および改易手続きについては、藤田恒春「大名『改易』の

構造」(『史泉』六五号)に詳しいので参照されたい。但し、これは旗本的な小大名の改易の場合であり、国持大名クラスの改易のあり方は、これとは大分異なっている。

(73) 御前公事の事例として次のようなものを挙げる事ができる。

慶長一四年九月 信州川中島一二万石の松平忠輝の家臣・国老ら対立し、大御所家康の下で公事対決。家老皆川  
広照流罪。

同 一五年二月 越後春日山三〇万石の堀忠俊の長臣堀直次とその弟直寄の確執、駿府で家康・將軍秀忠両者の御前で公事対決。直寄勝訴、堀家三〇万石改易。

同 一七年一月 越前福井六万七千石の松平忠直の家臣争論、江戸城西丸で家康・秀忠御前で対決。本多伊豆守勝訴、反対家臣流罪。

同 一八年一〇月 石見津和野三万石の坂崎成正と伊予宇和島一二万石の富田信高との公事争論。駿府で家康・秀忠御前で対決。富田改易。

元和二年 三月 陸奥会津六〇万石の蒲生忠郷の家臣蒲生源三郎と町野長門守との確執、駿府の家康の御前で対決。町野流罪。

同 四年 八月 肥後熊本五二万石の加藤忠広の家臣両派の対立、江戸城大広間で將軍秀忠の御前公事。加藤美作ら流罪。

(以上、典拠はいずれも『大日本史料』)

(74) 柳川騒動については田代和生『書き替えられた国書』(中央公論社 昭和五八年)、荒野泰典『近世日本と東アジア』(東大出版

会 昭和六三年) 参照

(75) 山口県文書館蔵、「福岡帳」寛永一二年三月一〇日条

(76) 寛永一二年三月晦日付、細川三斎書状「忠利宛」(『細川家史料』一三二八号)。この折りの御前公事および諸大名陪席の座配図は、田代前掲書一四八頁、荒野前掲書二〇六頁に掲載されている。

(77) 「福岡帳」同年三月一二日条

(78) 黒田騒動については、古くは中島利一郎「黒田騒動」(国史講習会編『御家騒動の研究』所収)があり、最近では福田千鶴「福岡藩『黒田騒動』の歴史的意義」(『日本歴史』五〇八号)がある。

(79) 『徳川実紀』寛永一〇年三月一五日条所引

(80) 「越後騒動」(北島正元編『御家騒動』人物往来社 昭和四〇年)

(81) 「松平大和守日記」天和元年六月二二日条、「会津藩家世実紀」同日条(吉川弘文館 昭和五二年)

(82) 津山市立郷土博物館蔵、松平家文書、「越後光長公御領没収之節御用控」(国立史料館、写真紙焼版史料番号P八一〇八―四七)

(83) 「会津藩家世実紀」天和元年六月二二日条

(84) 藤井譲治「幕藩制領主論」(『日本史研究』一三九・一四〇合併号)

(85) 淀稲葉神社蔵、稲葉家中文書、「家譜(稲葉正勝譜)」(国立史料館、写真紙焼版史料番号P七二〇八一四六)。なお天和元年の越後松平家改易の際の城地受け取り軍の構成については、村上藩榊原家のものを詳しく知ることができる(山田裕二「榊原氏(村上藩)の高田城受取記録」上下、『新潟県史研究』一二・一三号)。



(86) 『徳川実紀』寛永九年六月四日条

(87) 『大日本史料』元和五年六月二日条

(88) 『東武実録』元和五年六月条〔内閣文庫史籍叢刊〕第一巻、汲古書院 昭和五六年。なお「福島太夫殿御事」〔改定史籍集覧〕別記類)では、福島丹波を広島城の籠城指揮官とし、また菅戸瀬戸へ出向いたのは大橋・吉村両名のほか、福島式部・水野次郎右衛門とも合わせて四名としている。

(89) 『東武実録』元和五年六月条

(90) 寛永九年六月二十九日付、細川三斎書状「忠利宛」〔細川家史料〕九七九号

(91) 寛永九年六月一八日付、細川忠利書状〔熊本県史料〕近世篇第一、一一四頁

(92) 『改定史籍集覧・別記部』所収「加藤肥後守忠広之事」では、加藤家改易に伴う熊本城の明け渡しについてのくだりに、次のような後代の人物による書き込み注記が見られる。

「慶長五庚子ノ年、和州郡山ノ城ヲ増田<sup>(増田長盛)</sup>右衛門尉ヨリ渡辺勘兵衛ト云者ニ預ケオカレシニ一統ノ後、増田ハ奥州ヘ流罪也、城ハ藤堂和泉守ニ請取可申様ニトテ泉州郡山ヘ取カケラルル所ニ、勘兵衛申スハ、右衛門尉手判ヲ見申サヌハ渡し申間敷ト申ニ付、泉州ヨリイソキ大坂ヘ使ヲツカハシ右衛門尉手判ヲトリ勘兵衛ニ見スルニヨリ、無相違城ヲ渡シケルナリ、サテ又福島右衛門大夫流罪ノ時モ、上使ノ衆失念、右衛門大夫手判ヲ持キタラサルユヘ、福島家老トモ手判ナクハ城ヲ渡スマシキト申ニヨリ、江戸ヘ急ニ申ツカハシ左衛門大夫手判ヲトリ家老共ニ見セテ、無相違城ヲ請取タリ、此二度ノ事有之後ハイッモ手判ヲトリテ、留守ノモノニ

見スルユヘッイニ何事モナシ」(同書 七七二頁)

慶長五年の増田家の郡山城の件については、その事実関係を詳らかにしないが、この注記が語るとおり、元和五年の福島家の広島城の日以来、この明け渡し作法が確立されていたと見られるであろう。

(93) 『徳川実紀』寛文六年五月三日条

(94) 『会津藩家世実紀』天和元年六月晦日条

(95) なお参考までに、元禄一四年の播州赤穂城の明け渡しの折りの書付を掲げておこう。これは藩主浅野長矩が切腹死去して不在のため、長矩の従兄弟たる戸田采女正氏定(美濃国大垣一〇万石)から次のような判物が出されている。これは藩主不在時の開城墨付の事例としても興味深いものである。

「多川九右衛門、月岡清右衛門以ニ両使、被差越御紙面之趣、家中之面々無骨之至候、御当地不案内故に候、内匠日来奉レ重公儀被差勤仕候段、各存知之事に候、内匠え家中奉公之筋は速に其地を引払、城無滞相渡候儀、内匠日来之存念にも可相叶候間、不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>申候得共、追々差図之通、被<sub>レ</sub>相守早速穩便に被<sub>レ</sub>退候段、肝要之事候、此旨家中之面々承知之、可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>納得<sub>レ</sub>者也、

四月五日

戸田采女正印判

浅野内匠

家老中 番頭中 用人中 目付中 惣家中

追啓御当地に結合之面々えハ最初より右之旨申語候、以上」

(赤城土詰)『改定史籍集覧』別記類)

(96) 田原嗣郎『赤穂四十六士論』(吉川弘文館 昭和五三年)においても、赤穂浪士の行動の中に、「主君の主君は主君でない」と

いう、封建的主従関係を規定する重層的な支配原理を認めることができるとして、その観点において、幕藩制的な政治秩序を理解すべきことが指摘されている。

〔了〕

付記

本稿作成に際しては松江城城山管理事務所その他、閲覧の便宜を与えられた各方面の史料保存機関に対し、厚く御礼申し上げる次第である。また本稿の内容について討議批判を加えて頂いた幕藩研究会の諸氏に謝意を表わすものである。なお本稿の内容は既発表の拙稿「日本近世社会の新しい歴史像を求めて」(『日本史研究』三三三号)に関連している。併せ御覧頂ければ幸いである。